

第2部

単一国モデルによる分析 ——発展段階の相違を考慮する——

第2部にあたって

「はじめに」に記したように、第2部では貿易リンクモデルから離れ、単一国モデルによる分析例を紹介する。ここでは経済の発展度合いの異なる4カ国・地域を取り上げるが、共通のシミュレーションとして人口の高齢化を扱う他はそれぞれの分析者の興味に基づいた考察を行っている。また、同じくすでに記したとおり、統計の時系列的な長さや統計そのものの精度といった様々な制約から、推定パラメータの有意性にまで遡り必ずしも満足のいく（うまくいった）事例のみを紹介しているわけではないことを予防線としてお断りしておく。

堀（1982）を援用すれば、1対1の縮尺（つまり実物大）で細大漏らさずすべての情報を記載した地図というのは既にそれ自体「地図」ではないだろう。興味を中心となる一部の情報を強調し、それ以外の情報（大きさも含め）をカットすることで地図が成り立っている（堀によれば「適切な抽象化、簡易化、モデル化を行うこと、いいかえれば、本質でない要素を省略し、本質的な要素を誇張しながら抽出することによって（略）ものごとの本質をよりよくつかみ出そうとする営み」がそれにあたる）とすれば、マクロ計量モデルにもまさにこの言葉があてはまる。

閑話休題。第2部は以下の構成である。各章ともに共通のシミュレーションの題材として、高齢化問題を取り上げている。各国で進展する少子高齢化（相対的な年齢構成の変化）とそれに伴う人口や労働力の変動をショックとしてモデルに与え、消費をはじめとする国内需要への影響を測定する。

第4章「内需と人口変動のマクロ計量モデル分析：韓国・台湾モデルの利用例」（渡邊雄一）では、東アジアでは日本に次ぐ先進地域となっている韓国・台湾についてそれぞれの単一国モデルによる分析を紹介する。上述のように進行する少子高齢化が国内需要に及ぼす影響を、人口の年齢構成を10年ま

たは20年前倒しすることで測定するが、台湾のケースでは20年前倒しのケースはショックが大きすぎてモデルが収束しない、という一幕がある（あえてそうしたケースも収録している）。

第5章「マクロ計量モデルによるシミュレーション分析（マレーシア）」（植村仁一）ではマレーシアを対象とし、人口の高齢化シミュレーションとは別に財政部門の国内経済に果たす役割についても分析している。高齢化の進展と相俟って年金や補助金といった財政部門の役割は大きいと考えられる。本章ではそうした民間への移転部分をどうファイナンスするか、その原資の出所の違いが国内経済に与える影響を測定している。

第6章「ベトナムのマクロ経済モデルと人口高齢化の影響」（石田正美）でも同じく高齢化のシミュレーションを行うが、ベトナムの人口センサスからは少子化がすでに始まっていると伝えられるものの、まだまだ若い世代の占める割合の大きい国であることもあり、10年後から30年後といったかなり長い期間を見据えた将来の人口構成や総人口に基づく実験がある程度安定的に行えている。これは第4章での台湾のケース（収束しない例）と比較してみると興味深い点であるといえる。

編者 植村仁一

〔参考文献〕

<日本語文献>

堀淳一 1982. 「すべての地図はデフォルメ地図である」『数理科学』1982年1月号、12～15ページ.

<英語文献>

Fair, Ray C. and Kathryn M. Dominguez 1991. "Effects of the Changing U.S. Age Distribution on Macroeconomic Equations." *American Economic Review* 81(5): 1276-1294.